

府中町ふるさと歴史散歩

〔第34回〕

神武天皇東征伝承と府中町③

府中町の顕彰碑は表に、「神武天皇聖蹟埃宮・多祁理宮顕彰碑」、側面に「昭和十五年十一月 紀元二千六百年奉祝会」、裏面に、「神武天皇甲寅年十二月舟師ヲ帥辛安芸国ニ至リマシテ埃宮ニマシマセリ阿岐国之多祁理宮モ蓋シ此ノ宮ナラン聖蹟ハ此ノ地附近ニアリト伝ヘラル」と刻まれている。

『古事記』では、神武天皇の東征にあたり日向を出発して筑紫岡田宮に一年、阿岐の多祁理宮に七年滞在したとある。一方、『日本書紀』には安芸国の埃宮に約70日と、宮の名前も日数も違っている。戦前までは、神武天皇は実在の人物であると信じ、当時の「現下我が国第一流の」学者さえその存在を批判的に考え

なかつたので、埃宮と多祁理宮が同じものなのか別のもの

なのか、また、それは彼所だ、いや此処だということ、そもそも神話上の人物のことで問題にしても今日では分かるはずもなく、戦後の自由な学問研究からほど遠いものであることを銘記すべきである。二千六百年前の日本は、縄文時代晩期の時代で、まだ

コメ作りも金属器も知らず、野山を駆け巡って獣や魚を獲ったり木の実を採ったりする採集狩猟・漁労生活であったことは、戦後の考古学の成果が明らかにしている。神話は伝承として大切であるが、史実とは厳然と区別しなければいけないのである。

戦後に、戦前の文化財行政の見直しが行われ、昭和8年

(1933) 以来指定された

明治天皇聖蹟373件が指定解除された。神武天皇聖蹟は、第一号として建立された大阪の天満宮境内の「難波乃碕」碑は撤去されて跡形もない。府中町に残る神武天皇聖蹟碑は、前述のような事情から、戦前の超国家主義的な国策に乗じて建てられたものであるが、府中町に最後の石碑を建てた1ヶ月後には、多大なる犠牲と国土の荒廃を招いた太平洋戦争へ突入し、国民全体が戦争体制へ動員されたあの時代の記念碑と考えれば、むしろ残しておくべきであろう。

最後に、紀元二千六百年祭事業により八幡宮参道拡張工事等の勤労奉仕に参加した人の記録を引用しよう。「昭和十五年の紀元二千六百年記念

事業は大日本帝国の国体の明徴運動、敬神崇祖、国民精神昂揚運動の一環であった。奉祝式典は午前十時から神社において、直会は十一時半から小学校において、式典後の催物には餅撒、剣道、剣舞詩吟、万才、角力、茶会、花会などが行われた」。

(小林利宣「町の歴史・多家神社百年史」『安芸府中の文化』第6集より)

府中町文化財保護審議会会長

横田 禎昭

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272



写真：神武天皇が腰掛けて休んだといわれる「御腰掛岩」
(縦1m×横1.7m×高さ0.3m 府中町宮の町五丁目 松崎八幡跡地内)